



(挨拶の中坪達哉会長)

令和四年度総会及び俳句大会が、木々の緑の目映い六月四日(土)午後一時より北日本新聞ホールに於いて九十五名の参加を得、盛大に開催された。コロナ禍で総会中止を余儀なくされ、三年ぶりの開催となった。坂田直彦幹事司会のもと、中坪達哉会長は「三年ぶりの開催であるが、その間、会員各位から多くの句を寄せていただき、結びがより深まった。又、結社を超えた

リモート句会の実施やホームページの充実に努めてきた」と挨拶。

総会の議長に大谷こうき理事を選出し、中島平大事務局長が令和三年度の事業報告、収支決算報告を行い、大久保置治監事が監査結果を報告し、これらを承認。さらに令和四年度事業計画案、収支予算案を提案し、原案通り拍手で承認された。又、役員改選年度に当たっては中坪会長から現役員を再選した上で、跡治順子理事、石田英子理事、長沼三津夫理事(逝去)、新保吉章理事(逝去)の退任に伴い一部改選を提案。四宮一子、宮崎あつ子両氏が理事に、高田勇、堀真智子両氏が幹事に新しく就任することが承認され、全ての議案は可決し、総会は滞りなく終了する。

続いて「いには」主宰・村上喜代子先生の記念講演に移る。演題は「林火に学ぶ抒情の本質」で、林火は結婚後不幸が続いたが、俳句と闘うことを通して、俳

富山県俳句連盟会報

令和四年度

総会及び俳句大会

村上喜代子先生の講演を聴く

第 94 号

令和四年七月一日発行
富山市安住町二一四
〒930-0094 電話(076)449-1444
振替番号 金沢 五一一七二〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

富山県俳句連盟
夏季吟行会(予告)
日時 七月十八日(月・海の日)
午後一時より
会場 高周波文化ホール(新湊中央文化会館)三階研修室
射水市三日曾根三二二三
TEL 〇七六六八二八四〇〇
(内川周辺、海王丸パーク、新湊大橋、新湊漁港)

締切 十一月半厳守
会費 二句出句 千円
交通 十一時半厳守
あいの風とやま鉄道高岡駅下車、万葉線乗換、「新町口」下車徒歩五分

句によって人生が救われ、「人間愛の詩」として開花したと力説(講演要旨は別掲)小憩後、俳句大会に移り既に出句されていた五百八十句(二百九十名)について講師及び連盟役員によって選考された特選句並びに入賞句を森純子理事、久崎富美子幹事が披露し、表彰式に移る。

まず講師の村上喜代子先生より丁寧なる講評を戴く。続いて関口和美北日本新聞社生活文化部長から、北日本新聞社賞を、中坪達哉会長から連盟賞をそれぞれに贈呈された。(成績は別掲)

浅野義信副会長が閉会の辞を述べ、総会、俳句大会は盛会裡に終了した。

富山県芸術祭主催
富山県民芸術文化祭参加
富山県俳句連盟秋季俳句大会(予告)
講師 富山県写真家協会 会長
野崎博先生
日時 十月一日(土)午後一時
会場 北日本新聞ホール
※第四回越の讃歌、募集句のテーマ「食」

合同句集(第四十七集)
原稿募集
句集を次のとおり刊行いたします。同封の原稿用紙により全員ごぞってご応募ください。

○作品数 十五句(令和三年七月から令和四年六月までの自選句)

○記載要領 所定の原稿用紙に姓号、(ふりがな)作品(春夏秋冬の順が望ましい)本姓名、生年月日、郵便番号、住所、電話番号、所属結社または句会名を記載する。希望者は住所等の未掲載も可。

かなづかいには新旧混用せず何れかに必ず〇を付けること。

○締切 七月二十二日 期日厳守。

○出句料 三千元(一冊進呈)

同封の振替用紙で原稿発送と同時に郵便局へ払い込むこと。

○送付先 〒九三五一〇〇〇五
氷見市栄町一〇一六
坂田直彦方
富山県俳句連盟合同句集係宛

○刊行予定 十月

春季俳句大会作品抄

村上喜代子先生 特選句

大試験名残りの顔の出で来る
ほほづゑをして春愁を支へけり
啄木忌波の無限を力とす
陽炎に躓き易し吾が齡
春泥を軽く落して小屋かな
若土 白羊
室井千鶴子
石田阿畏子
二口わかう
数井 晴美

連盟選者特選句

義 信選 雪解村昔ばなしに山と川
かつを選 車から車へ移す春大根
冬 青選 木々芽吹く音階にのる夫唱婦隨
玲 子選 卒園の日も先生を追ひかけて
可津志選 啓蟄や畑の虫も我が身内
置 箔選 桜橋塩倉橋や花吹雪
こつき選 廃業のシャッターの錆つばめ来る
康 裕選 朝さくら佇立てて待つ新幹線
久 惠選 春の炬や明日を語れる友が居て
城 子選 飛花落花齡重ねて分かること
ゆつ子選 喉まで出でくる名前名荷汁
弥 生選 ほほづゑをして春愁を支へけり
富美子選 赤子泣く職員室の春休み
美智子選 手を添へてやれぬ彼方へ鳥雲に
洋 子選 切株の噴火のかたち春夕焼
直 彦選 母と子の影の重なる桜貝
一 子選 卒園の日も先生を追ひかけて
重 之選 痲癩の父鎮もれり春の雨
桂 子選 春泥を軽く落して小屋かな
恵 子選 蓬籠野のまぶしさのこぼれけり
昭 夫選 青春を語るに嘘もチューリップ
野中多佳子
日出嶋雅美
浜野かつみ
森 純子
齋藤 孝臣
土田 由朗
中 静子
平木美枝子
新田 義博
大倉 寿恵
平譯 敏子
室井千鶴子
栃原百合子
濱元 旭子
牧野きよ子
中村 真澄
森 純子
高木 昭夫
数井 晴美
森 純子
清水真智子

◇入賞句

勇選 父の味父の貌なり木の芽和え
眞知子選 入学式大きめの服列をなす
寿 山選 花万朵虚子の句碑へと礎のぼる
三 久選 さくらさくら統台されし母校かな
平 太選 合格の前に下見の自転車店
達 哉選 亡き母の野良着の重み畑を打つ
睦 子選 根白草人に生まれて水つかふ
美知子選 つなぐ手を解きぶらんこへ一目散
多佳子選 蓬籠野のまぶしさのこぼれけり
栄 子選 桜橋塩倉橋や花吹雪
眞智子選 ほほづゑをして春愁を支へけり
幸 子選 一年生家近づけば走り出す
千鶴子選 父の直球ピシッと受けて卒業す
純 子選 入社式ネクタイに射す朝日かな
稔 選 つちふるや化石になれぬ埋没林
とおる選 青き踏むこの径ゆけば立山寺
平譯 敏子
谷口 智子
成重佐伊子
成重佐伊子
新井のぶ子
山崎 和子
高野 弘深
湯口しずえ
森 純子
土田 由朗
室井千鶴子
水野 元雄
島倉 千春
内田 慧
鈴木 幸雄
吉崎 陽子
室井千鶴子
水野 元雄
石田 英子
西野 睦子
森 純子
杉本 恵子
古小路恵子
中島 平太
湯口しずえ
横沢 秀典
石川 彰子
八尾とおる
島倉 千春
室井千鶴子

7位⑥ 露の臺摘みて八十路を踏み出せり 四宮 一子
⑥ 目覚ましを試しに鳴らす入学式 田中 帝子
⑥ 何にでもなれる嬰の瞳風光る 二俣れい子
⑥ 飛花落花齡重ねて分かること 大倉 寿恵
⑥ 亡き母の野良着の重み畑を打つ 山崎 和子
⑥ 青春を語るに嘘もチューリップ 清水真智子
8位⑤ 雪解村昔ばなしに山と川 野中多佳子
⑤ 春炬燵花開くごとさら寝入る 島倉 千春
⑤ 朝さくら佇立てて待つ新幹線 平木美枝子
⑤ うららかや富山もようの電車来る 金山美恵子
⑤ ふらここやこんなに低い子の目線 西口 鶴子
⑤ 卒寿すぎ歩巾ちぐはぐ青き踏む 齋藤 孝臣
⑤ 春泥を軽く落して小屋かな 数井 晴美
9位④ つちふるや化石になれぬ埋没林 鈴木 幸雄
④ 蓬籠野のまぶしさのこぼれけり 森 純子
④ 啓蟄や畑の虫も我が身内 齋藤 孝臣
④ 廃業のシャッターの錆つばめ来る 中 静子
④ 母と子の影の重なる桜貝 中村 真澄

富山県現代俳句協会
秋季吟行俳句大会(予告)
秋の自然と遊園地を詠もう!
日時 九月二十三日(金・祝日)午前十時受付
会場 魚津水族館となり レストランハウス二階
魚津市三ヶ一三九〇
吟行地 ミラージュランド、水族館等
参加費 二句千円

俳人協会富山県支部 俳句大会(予告)
協会員以外の方のご参加も歓迎いたします。
日時 九月二十三日(金・秋分の日)
会場 富山電気ビル 午後一時
講師 「雲取」主宰 鈴木 太郎 先生

講演要旨



林火に学ぶ抒情の本質

「いには」主宰

村上喜代子



□はじめに

大野林火は俳壇を代表する抒情俳人の一人である。白田亞浪に師事しアンチホトトギスから出発したが高浜虚子論を四度にわたって執筆。虚子の本質に迫った。虚子と比較対称することにより抒情とは何か。俳句とは何か。その本質は何かを考えてみたい。

□大野林火の生い立ち

明治37年3月、横浜市日の出町に生まれる。本名 正(まさ) 本籍は千葉県館山市。中学時代、文学熱に憑かれる。鈴木三重吉や佐藤春夫の純情詩に憧れた。後の俳文学者、荻野清と同級、共に元町ブラヤオペラ観劇。出席日数不足で落第。荻野家の家庭句会に入れられ俳句に導かれた。前田普羅の「加比丹」句会に何度か出席。

〈焚火踏まえて袖夕闇に消え去んぬ〉入選。この句から俳号を「林火」とした。

□林火の俳人としての生涯を、修業期・熟成期・収穫期に分ける。

「修業期」―白田亞浪主宰「石楠」入会(大正10)、「演」創刊(昭和21)まで。

・金沢四高入學、亞浪の「石楠」入会。作風は馴染めなかったが可愛がられ、自由に句作、論客としても名を馳せた。

・東大卒業後、結婚。家庭的には不幸が続いた。長男を三歳で亡くし看病疲れから妻も死亡。二人の新盆を同時に修した。

・八丈島に行き、俳句に縋って生きる気持ちから闘う気持へ変わった。

・『現代の秀句』執筆(昭和16年、四版を重ねた。評論家としてデビュー。

・『高濱虚子』執筆(昭和19年)。丸ビルに通い虚子の背中を見ながら「ホトトギス」を読む。結びに「次代の俳句はこの巨大なる虚子を乗り越えたとここに樹立」「虚子により見捨てられた俳句と生活…人間精神を復活させる」ことにある、と。虚子の答(私によつて見捨てられた生活とは、人間精神とは。…実作によつて示せ)。

「熟成期」―「演」創刊以後、還暦(昭和39)まで。

・「演」創刊(昭和21年1月号)ガリ版刷り
創刊の言葉―演という語感の持つあ

かるさ、おほらかさ、ひろさ、きよらかさをそのまま作品に具現したい。カリエスで療養中の野澤節子を指導育成(後に「蘭」主宰)。ハンセン病に罹患した村越化石等を草津に訪問指導(約26年間)、化石を蛇笏賞作家に育てた。

・総合誌「俳句」の編集長を4年、人材を発掘。(能村登四郎・沢木欣一等)
「収穫期」―還暦以後(終焉(昭和57年)を迎えるまで。

・還暦を迎えて老いを自覚、二つのテーマを課す。

①各地の年中行事を訪ねての旅「風の盆」「青花摘み」「てんと花」「蘇民将来」
柳田國男から『年中行事賞書』を貰った。

②吉野山の山桜の美に魅かれて以後、毎年核行脚の旅をした。

・俳人協会会長就任(昭和53)。俳人協会訪中団団長として二度中国を訪問。

□虚子と対比して林火抒情の本質を考える。
林火・白田亞浪に学びアンチホトトギスから出発。生来のロマンチストが虚子を学ぶことによつて情を具象であらわすことを学ぶ。人生諷詠、人間諷詠、人間愛。芭蕉の軽みを受け継ぐ(言葉は易しく思ひは深く)。進取の気性に富み新しい季語を発掘。中庸の人柄で俳壇をリードした。名伯楽。

虚子・「ホトトギス」主宰。客観写生・花鳥諷詠(生活もその一つ)。子規の写生論から出発。西洋的自我の影響を

受けていない。客観写生は会員を増やす方策であつて虚子自身は主観派。〈俳諧須菩提経〉。虚子は自然教の教祖的存在。

□結語

生来のロマンチストだった林火は、虚子によつて思いを具象で表すことの大切さ(表現方法を学んだ。初期に家庭的不幸を体験、俳句によつて救われた、との思いから、俳句を人生の伴侶とし支えとし人を導いた。人は俳句によつて救われる。

*虚子の句10句抄出

遠山に日の当りたる枯野かな
一つ根に離れ浮く葉や春の水
白牡丹といふといへども紅ほのか
流れ行く大根の葉の早さかな
大空に羽子の白妙とゞまれり
龍の玉深く蔵すといふことを
手毬唄かなしきことをうつくしく
爛々と昼の星見え菌生え

去年今年貫く棒の如きもの
明易や花鳥諷詠南無阿弥陀

*林火の句10句抄出

鳴き鳴きて囀は霧につつまれし
燈籠にしばらく残る句ひかな
あをあをと空を残して蝶分れ
ねむりても旅の花火の胸にひらく
落葉松は雪をとどめずさらさら鳴る
雪の水車ごとんことりもう止むか
風の盆行く先しらね流しに蹤く
淡墨桜風立ては白湧きいづる
あけほのや花に会はむと肌着換へ
萩明り師のふところにあるごとし

令和3年度決算報告書

(単位:円)

Table with columns for Income (収入) and Expenses (支出) for the 3rd year. Includes items like 繰越金, 会費, 助成金, etc.

(収支差額(収入合計-支出合計) 1,214,334円は次年度へ繰越)

令和4年度予算計画書

(単位:円)

Table with columns for Income (収入) and Expenses (支出) for the 4th year budget. Includes items like 繰越金, 会費, 助成金, etc.

消 息

○富山県現代俳句協会は、令和四年度、総会及び春季俳句大会を、コロナ禍のため紙上大会として、四月十六日表彰式を行った。投句総数九十七句、投句者九十七名全員で互選。

地位 日本海丸ごとすする鮫鱈鍋 野坂千佳子
人位 心にも杖を一本桃の花 柄沢 恭子

○第三回富山県現代俳句協会賞 受賞
爪の行方 森川 敬三
秋闈ける 久保 俊一

○日本現代詩歌文学館で、三月十八日、令和五年三月二十二日まで、二〇二二年度日本現代詩歌文学館常設展 まつりと詩歌

妖怪の宴もあらむ夜の花野 中坪 達哉
色紙とコメント、句の朗読音声が表示されている。ウェブ展示室にでも見ることが出来る。

○県俳連の春季、秋季俳句大会の投句葉書(平成二十六年(令和元年)約五千枚が当時の担当、室井千鶴子幹事の元で、今日まで保管されていた。去る二月二十日(日)、浅野義信副会長の同席のもと豊田火宮社の神殿において、日枝神社の平野旨明宮司にお焚き上げの供養をしていただいた。

○石川県俳文学協会、令和四年初夏の俳句大会(ゆーりんピック)が令和四年度五月二十九日、金沢勤労者プラザで開催。講師 中坪 達哉 演題 「何を詠んで、何を読むか」

句集出版紹介

「追憶」 船平晩秋 令4・1
「はじめのはじめ」石黒忠三 令4・1
VITAクラブ俳句教室 令和三年度句集 令4・2

計 報

富山県俳句連盟理事 新保 吉章氏
令和三年十二月十日逝去。
謹んで哀悼の意を表します。

第41回「やま文学賞」作品集

俳句 未発表句 二十句
(四百字詰原稿用紙を使用、ワープロ・パソコン原稿は二十字二十行打ち)
締切 令和四年九月三十日(消印有効)
送り先 〒930 0006 富山市舟橋北町七一 (株)富山県芸術文化協会事務局

編集後記

連盟会報94号をここにお届け致します。次回95号は令和四年十二月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば原稿用紙に記入の上、左記に送付下さい。(郵送又はFAXのみ)
〒931-0121 南砺市井波 四八五二一六
FAX:TEL (七五七) 八一一九〇八

高田 勇